

いのちと地域を守る

宮城県沖地震で1階部分が壊れ、2、3階が崩壊したビル。破文と彫られた建物が大きくゆがんだ。仙台市宮城野区宮野



宮城県沖地震から38年

インフラ寸断 市民混乱

1978年6月12日に発生した宮城県沖地震から38年を迎える。地震防災の原点ともなった大地震。当時の被害を思い起こし、揺れへの備えを見直したい。

宮城県沖地震は、仙台圏を直撃し、ブロック塀の倒壊などで28人が死亡した。電気、水道、ガスも相次いでストップ。人口約5万だった仙台の市民生活が混乱し、全国初の都市型災害といわれた。6・12の衝撃を当時の河北新報で振り返るとともに、被害の一端を伝えた。

地震翌日の朝刊1面は写真①の通り。揺れて崩れ、大きく変形した仙台市内のビルの写真とともに、被害の一端を伝えた。

宮城県沖地震 1978年6月12日午後5時14分、金華山沖の深さ40kmを震源に発生した。当時の基準で大船渡、仙台、石巻、新庄、福島で震度5、盛岡、秋田、山形で震度4、青森では震度3を記録した。気象庁によると死者28人(宮城27人、福島1人)、負傷者1325人。全半壊した住宅は計6757棟。北海道と東北の太平洋沿岸で10~30%の津波を観測した。



熊本地震や岩手・宮城内陸地震

活断層にも警戒必要

宮城県沖地震は震源がプレート境界の海溝だった。4月の熊本地震や2008年の岩手・宮城内陸地震、1995年の阪神大震災のように内陸の活断層が引き起す大地震もある。足元に潜む災害への備えが欠かせない。岩手・宮城内陸地震は8年前の6月14日午前8時43分ごろ起きた。震源は岩手県内陸南部で深さ約8km。栗原市と奥州市で最大震度6強を観測した。栗原市栗駒の荒沢沢では国内最大級の地滑りが発生し、山塊が水平方向に最大300m滑った。一関市の祭時大橋は、橋を支える橋台が10m以上ずれて崩壊した。

震源の浅い内陸の地震は地盤災害を発生させ、大量の土砂が流れ込んだ荒沢沢ダム=2008年6月16日、栗原市栗駒

<東北の主な内陸地震>

発生日	名称	震源	マグニチュード(M)	最大震度	主な被害
1956年9月30日	白石地震	宮城県南部	6.0	震度4	死者1人、非住家3棟倒壊
1962年4月30日	宮城県北部地震	宮城県北部	6.5	震度4	死者3人、住家計1911棟全半壊
1996年8月11日	8・11宮城県北部地震	宮城県北部、秋田県内陸南部	6.0など	震度5	住家半壊28棟
2003年7月26日	宮城県連続地震	宮城県北部	6.4など	震度6強	負傷者647人、住家被害6413棟
2008年6月14日	岩手・宮城内陸地震	岩手県内陸南部	7.2	震度6強	死者23人

※Mの「など」は多発地震のため。主な被害は仙台管区気象台などのまとめ



初代仙台市地震防災アドバイザー 京英次郎さんに聞く

宮城県沖地震の再来が懸念されている。2003年、仙台市消防局は「地震災害対策強化担当」(通称「地震防災アドバイザー」)を設けた。同局職員が歴代アドバイザーを務め、地震防災のポイントを地域での講演で解説している。初代担当で東北福祉大特任講師の京英次郎さん(84)に、備えの基本を聞いた。

(聞き手は大泉大介)

呼び掛けたいのは、完璧な備えを求めるあまり「結局何もなかった」は避けたいということ。「松竹梅の梅でいい」が私のメッセージだ。家の耐震補強費用がないなどを諦めず、「できることから始めよう」と行動に移してほしい。

無防備な状態になる自宅の寝室や居間に、落ちてきたり倒れてきたりする

まずは命を守ろう

物がなければ、ほかの部屋に移し、設置の向きを変える。これだけでも安全性は高まる。

外出先で地震に遭うこともある。ブロック塀や自販機が凶器になると知って、いざというときに反応できる。知らない人は慌てる。宮城県沖地震を音め、過去の災害にも学んでほしい。

備えという言葉を聞き出し、非常食が目立っているが、それは命あつての話。まず命を守ることに意識を向けるべきだ。

東日本大震災の過酷な経験から「これ以上の災害はない」と思い込んでいないか。津波への意識が薄まった結果、地震から身を守る意識が薄まった。結果、いか。こうした点に注意し、備えの継続を訴えたい。

住民同士の結束力が大切

宮城県防災指導員(栗原市花山) 千葉優子さん(63)

栗原市は岩手・宮城内陸地震と東日本大震災で2度の大地震を経験しました。風化が懸念される中、地域では手作りの新聞などを通じて災害への心



構えをあらためて確認し、楽しみながら訓練を実施しています。

最も大切にしてほしいのは住民同士の結束力です。過去の災害では、共助の精神が復興の基礎

となりました。防災知識やマニュアルに勝るとも劣らない財産だと思えます。

震災後は集落の合言葉として「地域は一つの大きな家族」を掲げました。今後もイベントや訓練を無理なく続け、さらなる一体感の醸成を目指したいです。

現場から

高台避難までの時間計る

日本製紙石巻工場総務課課長 代理 村上義勝さん(53)

東日本大震災後は防災訓練とは別に避難訓練も実施し、職場から高台に逃げるまでの時間を計っています。社員はあの日の



記憶があるので積極的に取り組んでいます。

震災時は朝と昼の勤務の交代時間と重なり、社員ら約1300人が工場の敷地内にいました。当時は無事避難できましたが、取り残される人はいかに出さないようにするかが大事です。今は現場の班長らに無線機を持たせ、スムーズに伝達できるようにしています。

天災はいつ起こるか予測がつかせません。慌てることなく、確実に自分の身を守るように備えておくことが大事だと思います。